特別講演会

動乱の世から太平の世へ

戦国を乗り越えた人々のくらし

二〇二〇年十二月六日（日）

京都産業会館ホール

特別講演

「かわりゆく京都
秀吉のお土居と家康の二条城」
京都大学名誉教授　藤井　譲治

講演

「戦国・桃山時代と京都のすがた」
同志社女子大学教授　山田　邦和

報告

「遺物からみる戦国・江戸のくらし」
京都府埋蔵文化財調査研究センター調査員　加藤　雄太

主催

京都府教育委員会
公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

KYOTO ARCHAEOLOGY CENTER

参考画像：［国宝］洛中洛外図屏風（上杉本）（米沢市上杉博物館 蔵）
写真：寺町旧域出土 京焼茶道具（皆具）・平安京跡薮之内町出土 織部向付

かわりゆく京都

秀吉の御土居と家康の二条城

京都大学名誉教授
藤井　譲治

はじめに

歴史的事象を、新たな視座からみると、その位置づけや評価は変わる。

Ⅰ　秀吉の「唐入り」構想のなかでの御土居築造を考える

「御土居」築造は秀吉による京都の大改造の仕上げとして位置づけられてきた。

1．御土居の築造

【規模】　【図１】

東は鴨川、北は鷹峰（たかがみね）、西は紙屋川、南は九条を限りとして、京の町を取り囲む。

全長約 22.5 キロメートル、土塁の高さは約３メートル、基底部約９メートル

堀幅 3.6 メートルから 18 メートルを随伴

【築造過程】

天正 19 年（1591）閏（うるう）正月に築造開始、２月に過半完成、４月にはほぼ完成。

【築造の目的】

史料１　近衛信尹（このえのぶただ）の日記『三藐院記（さんみゃくいんき）』

天正十九年壬正月ヨリ洛外ニ**堀**ヲホラセラル、**竹**ヲウヘラルゝ事モ一時也、**二月**ニ過半成就也、十ノ口アリト也、此事何タル興行ソト云ニ、**悪徒出走ノ時ハヤ鐘ヲツカセ、ソレヲ相図ニ十門ヲタテゝ、其内ヲ被捲為ト也**

史料２　武家伝奏の勧修寺（かじゅうじ）晴豊の日記『晴豊公記』天正 19 年２月２日条

京中惣ほり、口六十間之由申候、屋敷かへ中／＼らん（乱）の行ことく也、

2．秀吉の「唐入り」構想と御土居築造

天正 13 年　9/3 秀吉、「唐国」侵攻の構想を示す。

天正 15 年　3/1 島津攻めに大坂から出陣。5/8 島津氏降伏。

5/4 薩摩にいた秀吉、宗義調（そうよししげ）に高麗への軍勢派遣を伝える。

5/15「自大唐南蛮国之船着」場である博多に城を築き、高麗への軍勢派遣を表明。

9/3 秀吉、聚楽第に移る。

10/14「唐、南蛮、高麗国」の「征伐」のため来春、博多への動座を表明。

天正 16 年　4/14 聚楽第行幸。7/8 刀狩り令・海賊停止令。

天正 17 年　3/28 朝鮮国王の日本出仕が実現しないなか、翌年「唐入り」のため加藤清正と小西行長を「先勢」として派遣決定。宗氏の朝鮮国王惨落交渉により延期。朝鮮政府は日本への使節派遣を決定。秀吉、朝鮮国王の「参洛」を寒天を理由に翌年春まで猶予。

天正 18 年　3/1 小田原攻めのため京都出陣。7/5 北条氏降伏。

3/6 朝鮮使節、漢城発、7/21 京都着。

8/20 駿府で小西行長・毛利吉成に天正 19 年春の「唐入」の準備を命じる。

11/7　朝鮮使節を聚楽第において引見。

天正 19 年　閏 1 **御土居の築造開始**

9「唐土御征伐之事」において加藤清正・小西行長等を先陣とすること、日本では「尾州中納言（秀次）･会津少将（蒲生氏郷）に「令守帝都」ことを表明。

史料３　（天正 19）9. 下　「徴古雑抄（ちょうこざっしょう）」13 上『楓軒文書纂（ふうけんもんじょさん）』68

唐土御征伐之事、季春之朔日御出勢至日限被相定畢、（中略）先軍勢魁之事、筑紫之物主加藤主計頭清正・小西摂津守行長・黒田甲斐守長政等に相添九州士卒先陣之、毛利右馬頭輝元一家・四国侍等為二番備、此外段々勢至対馬之地、可令渡海、於日本者尾州中納言（秀次）･会津少将両家之輩残置、**令守帝都**、（中略）

天正十九年九月下旬　　御朱印

9 宗義智が朝鮮に渡り、秀吉の征明を伝えるが、朝鮮はそれを無視。

12/28 秀吉、関白職を甥の秀次に譲り、来春三月高麗への渡海を表明。

天正 20 年　1/5 出陣の掟で「今度**大明国**へ御動座に付いて」と述べる。

3/26 秀吉、京都発、肥前名護屋へ、4/25　名護屋着。

5/6 秀吉、北政所に「**から**（唐）をも九月ころにはとり申すべし、九月のせつく（節句）の御ふくは、**からのみやこ**（都）にてうけとり可申候」と報じる。

5/16 秀吉、清正からの５月２日（実際には３日）に漢城入城の報を受ける。

5/18 秀吉、秀次に「**三国国割計画**」を示す。　【図２】

史料４　天正 20 年 5 月 18 日　関白豊臣秀次宛秀吉朱印状

②高麗都、去二日落去候、然間、弥急度被成御渡海、此度大明国迄も不残被仰付、**大唐之関白職**可被成御渡候事、

⑱**大唐都へ叡慮**うつし可申候、可有其御用意候、明後年可為行幸候、然者、

都廻に国十ヶ国は可進上之候、其内にて諸公家衆何も知行可被仰付候、下ノ衆可為十増倍候、其上之衆は可依仁躰候事、

⑲**大唐関白**、右如被仰候秀次え可被為譲候、然者都之廻百ヶ国可被成御渡候、日本関白は大和中納言・備前宰相両人之内、覚悟次第可被仰出事、

⑳**日本帝位之儀**、若宮・八条殿、何にても可被相究事、

㉒震旦国へ叡慮被為成候、路次例式行幸之可為儀式候、御泊々、此度御出陣道路御座所可然候、人足伝馬は国限に可申付事、

㉔**平安城并聚楽御留守之儀**、追而可被仰出事、

史料５　天正 20 年５月 18 日山中長俊書状「組屋文書」

うへさま（秀吉）ハ、**ほんきん**（北京）のミやこに御さ所をなされ、又それをたれ（誰）そ御すへなされ、にほん（日本）のふなつき（船着）**にんぽうふ（寧波府）**［　　］きよ所を御きわめなさるへき［　　］

→北京には後陽成天皇、関白秀次、秀吉は寧波

京都（日本）良仁親王か皇弟の智仁親王

5/29 泗川（サチョン）沖の海戦で日本軍敗北。

8/20 伏見に「御隠居所」築造開始。8/29 和平交渉開始。

秀吉の御土居構築は「唐入り」を念頭において、京都の防衛と治安維持を目的として築造されたもの。

Ⅱ　二条城の築造

二条城の近年の紹介　パンフレットから

二条城は 1603 年（慶長８年）江戸幕府初代将軍徳川家康が、**天皇の住む京都御所の守護と将軍上洛の際の宿泊所**とするため築城したものです。将軍不在時の二条城は、江戸から派遣された武士、二条在番によって守られていました。

【年表】1624 年（寛永元年）　**３代将軍家光**、城の拡張・殿舎の整備に着手。

１．家康の二条城―家康の「京都屋敷」

・「二条城」呼称　　【図３】

慶長６年（1601）に家康の京都屋敷として計画

史料５　『義演准后日記（ぎえんじゅごうにっき）』慶長６年５月９日条

伝聞、京都ニ内府（家康）**屋形**立云々、町屋四・五千間モノクト云々、

史料６　『言経卿記（ときつねきょうき）』慶長６年５月 13 日条

内府（家康）**京都屋敷**三条柳ノ水辺三町四方云々、御出了、御覧也云々、

慶長７年４月　堀・石垣等の普請が加藤清正等諸大名に命じられる。（『下川文書』）

規模を「二条堀川西神泉苑北囲方四町之地」

慶長７年 11 月　「**二条ノ御屋敷**」の松 10 本を植えるための人足、「**御屋敷**」の壁下地作りを北野社に命じる（『北野社家日記』）。

慶長８年３月21日 完成した二条城に家康が初めて入る。　　**写真（勝興寺本）**

史料７『時慶卿記（ときよしきょうき）』慶長 10 年７月 21 日条

大樹（家康）従伏見、**二条御屋敷**へ御出京、北山金閣御見物ノ由候、

史料８『永日記（えいにちき）』

神君（家康）二条の御城に御座候時、**其頃ハ御城とハ云す、御屋敷と云、**

・「二条城」使用からみた位置―家康にとっての上洛時の拠点は伏見城

表　慶長８年から元和元年までの家康の上方滞在と二条城

年	伏見城	二条城	備　考
慶長８年	～ 10/18	3/21 ～ 4/16　7/3 ～ 15	2/12 将軍宣下 3/25 参内
９年	1/29 ～⑧ /14	6/10 ～ 7/1	6/22 参内
10 年	2/19 ～ 9/15	4/8 ～ 15　7/18 ～ 8/22	4/10 参内 4/16 秀忠伏見で将軍宣下 4/17 ～ 27 秀忠二条城
11 年	4/6 ～ 9/21	7/27 ～ 8/12	4/28 参内 8/11 参内
12 ～ 15 年	上洛せず		
16 年		3/17 ～ 4/18	3/23 参内
17･18 年	上洛せず		
19 年		10/23 ～ 1/3	秀忠伏見 大坂冬の陣 12/28 参内
20 年		4/18 ～ 8/4 ※７月に元和に改元	秀忠伏見 大坂夏の陣 6/15 参内
元和２年	上洛せず		4/17 駿府で死去

慶長５年の関ヶ原後、家康の上方での拠点は伏見城で、二条城ではない。

慶長８年２月 12 日 軍宣下は伏見城で、以降二条城在城帰還は短期間

慶長 10 年４月 16 日 秀忠の将軍宣下も伏見城で

慶長 12 年 伏見城から駿府城に拠点を移す。

これ以降の上洛は、後陽成天皇の譲位と後水尾天皇の即位の慶長 16 年と慶長 19 年の大坂冬・夏の陣。

２．秀忠にとっての二条城

秀忠　大坂冬の陣、大坂夏の陣は伏見、慶長 20 年 6/15 参内

元和３年（1617）６月 29 日 伏見着　７月 21 日京都（参内、二条城に入らず）

元和５年５月27日伏見着　７月25日京都（参内、二条城には入らず）

９月18日伏見発　二条城に立ち寄り、その日に京都発。

元和９年　二条城６月８日～７月６日　大坂７月６日～13日　二条城７月13日～閏８月21日

家光は伏見城７月13日～閏８月８日　７月27日伏見城で将軍宣下

この間10度二条城に行くが日帰り。８月６日は参内、その日に伏見へ

→秀忠は極力二条城を使用しない。しかし二条城は秀忠の城

・寛永３年の後水尾天皇の二条城行幸と二条城大拡張―二条城拡張の主

・寛永元年（1624）、行幸を見据えて二条城の拡張開始

西側に大きく城域を拡張し本丸を設け南西隅に天主造立、行幸御殿の建設

・二条城拡張の主

史料９　寛永元年10月４日付江戸幕府西丸年寄連署奉書（『大工頭中井家文書』）

以上、

書状之趣令披見候、**二条御殿御差図被差上候則到来候**、京大坂御作事不被存油断之通尤之儀候、弥可被入精候、恐々謹言、

（寛永元年）　永（永井）信濃

十月四日　尚政（花押）

井（井上）主計

正就（花押）

中井大和（正清）殿

→永井尚政・井上正就は秀忠付西の丸年寄→**二条城拡張の命は秀忠**

史料10　寛永２年６月29日付板倉重宗書状（『大工頭中井家文書』）

猶々、**二丸御座之間北之方ニ　将軍様（家光）御座間小キ御殿壱立申候**、軈而御指図参候間可有其御心得候、（中略）

先日御作事之儀申入候処、何も御心得之由委御報祝着申候、（中略）恐々謹言、

（寛永二年）　板（板倉）周防守

六月廿九日　重宗（花押）

中井大和（正清）殿

御宿所

→「二丸御座之間北之方ニ将軍様（家光）御座間小キ御殿壱立申候」→**家光は二条城の主人ではない。**

・寛永３年　秀忠、二条城６月20日～10月６日、家光８月２日～９月25日二条城、

・寛永３年９月６日、後水尾天皇の二条城行幸、

行幸最初の七五三の振舞、正面上段には後水尾天皇、その右手上座に大御所秀忠、将軍家光はその下座（『資勝卿記』）

・寛永３年９月15日、秀忠太政大臣、家光左大臣昇進の二条城で公家衆の御礼

『紀年録』寛永３年９月15日条

於二条本丸、大相国（秀忠）御昇進之御祝儀、公卿・殿上人及武家諸大名五千石以上献太刀目録、［各装束］、同日、於二丸、将軍家（家光）御昇進之御祝儀、右面々勤礼同前、

→二条城の主、行幸を迎える主人は家光ではなく秀忠

おわりに

その時代に生じた出来事を、京都という視座からみれば、秀吉の御土居築造は、秀吉による京都大改造の総仕上げともみえますが、秀吉の「唐入り」構想のもとでは、「御土居」は、天皇の北京移徙が構想され、また武士が朝鮮出兵に総動員されるなか、京都の治安を維持するために築造されたものであったといえます。

二条城については、家康上洛時の拠点は二条城ではなく、伏見城であり、家康の段階では、「二条城」は家康の京都屋敷という性格を基本としたものでした。２代将軍秀忠は、将軍在世時代は上洛しても、二条城を使用せず徳川の京都屋敷としての機能をほとんどもっていませんでした。寛永３年の二条行幸に際して、二条城は本丸を備えた城郭として拡張されますが、それを進めたのは３代将軍家光ではなく、大御所であった秀忠であり、二条城の主は家光ではなく秀忠でした。

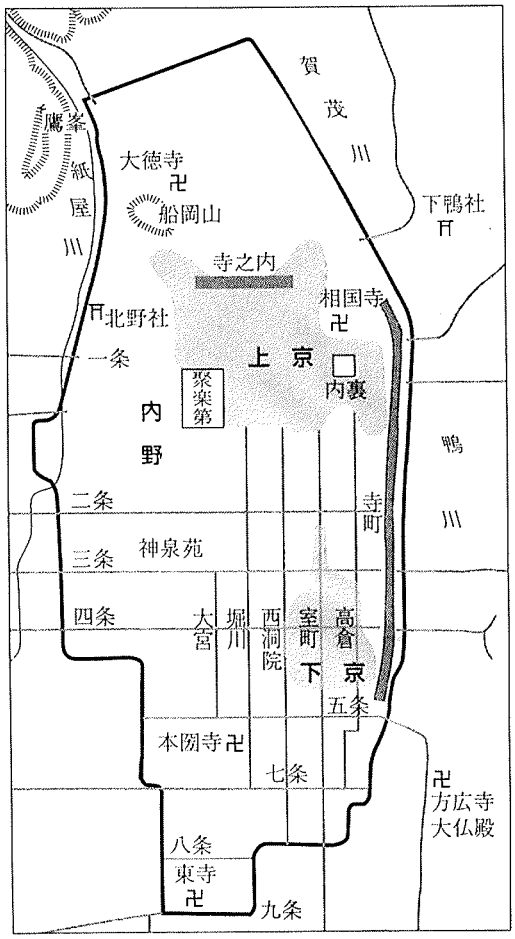


図１　御土居図 ━ が御土居。京都市編『京都の歴史』をもとに作成。

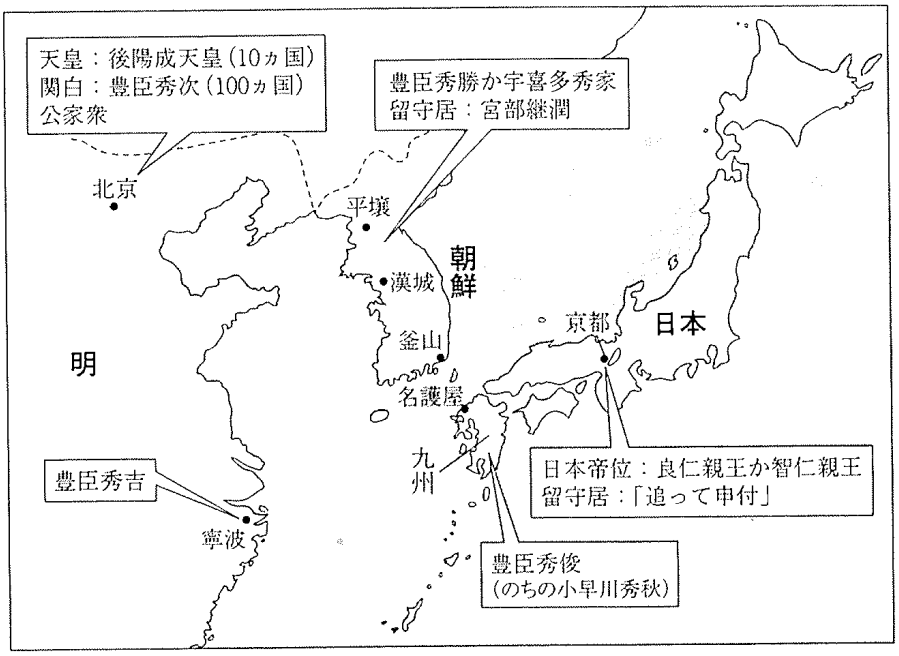
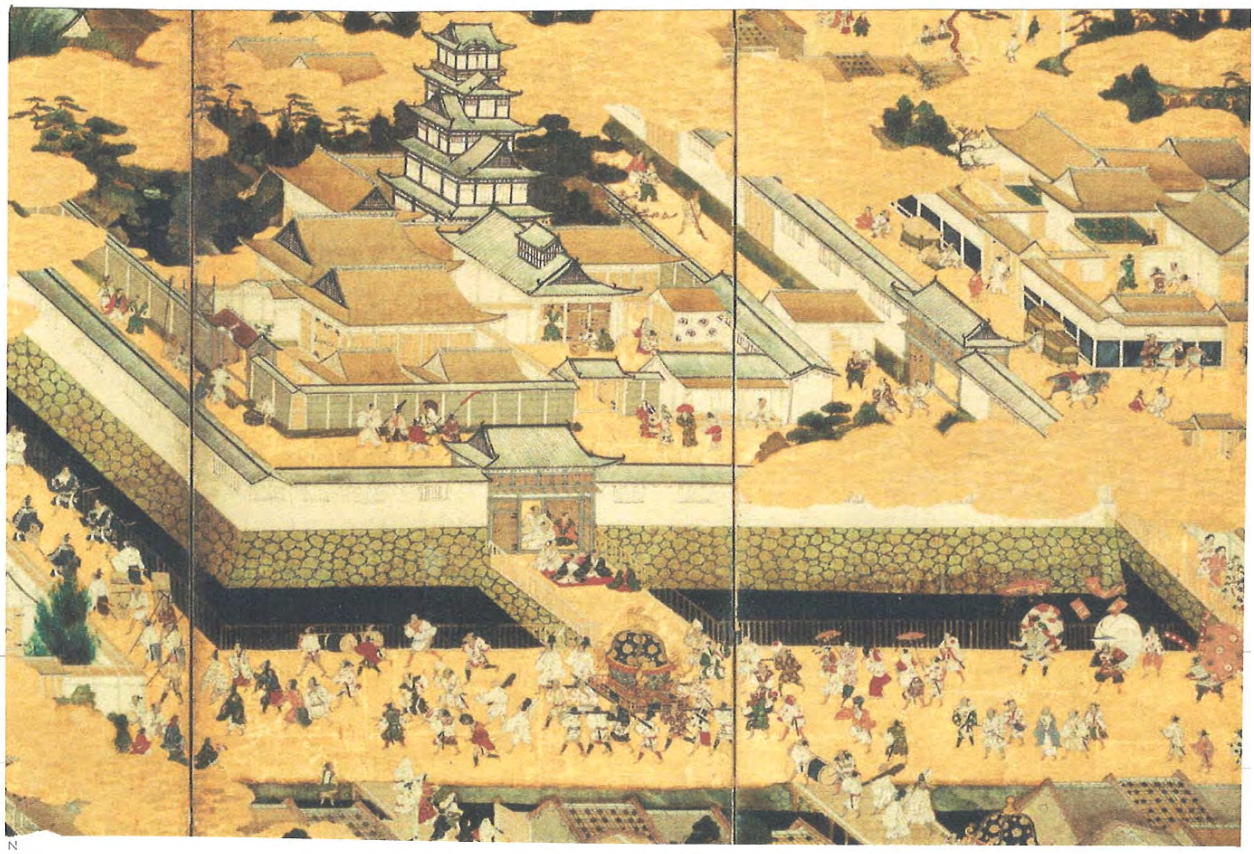


図２　三国国割構想の概念図



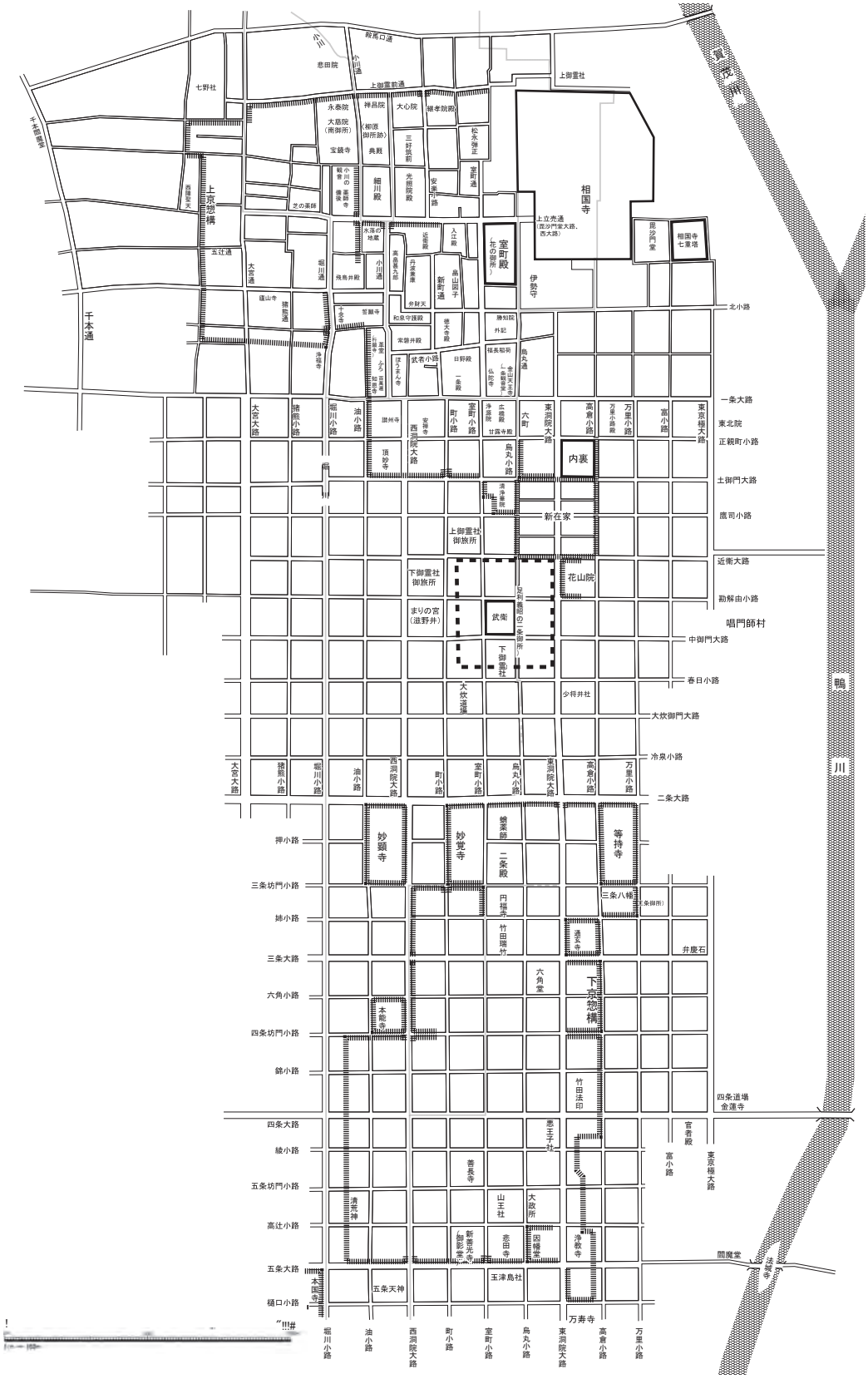
二条城（洛中洛外図屏風　勝興寺本）

図３　二条城模式図

特別講演会資料　2

戦国・桃山時代と京都のすがた

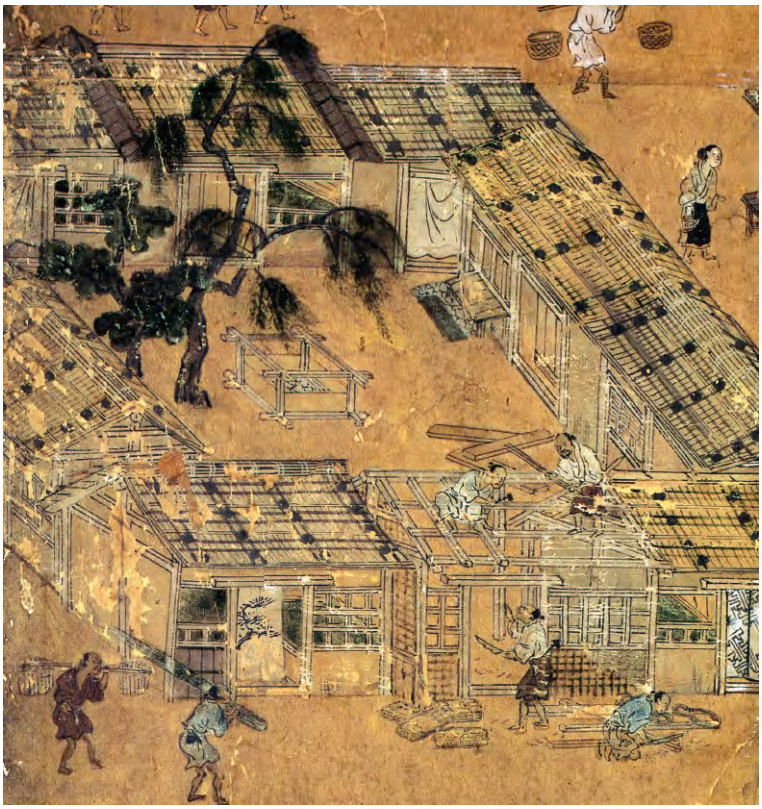
同志社女子大学教授
山田　邦和



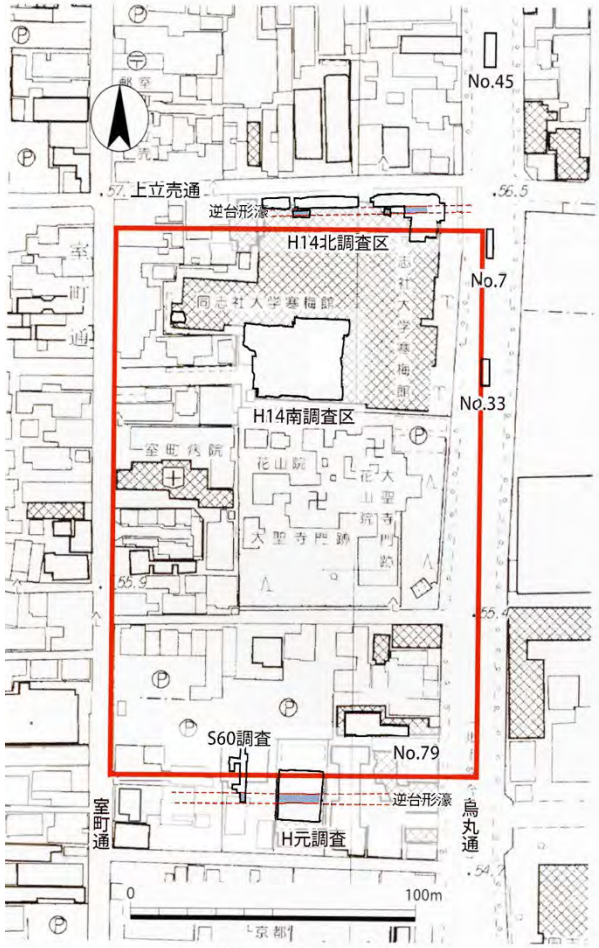
戦国期京都復元図（山田邦和作成）

室町殿（花の御所）
（上杉家本洛中洛外図屏風）
（右上に「輿に乗る貴人」）

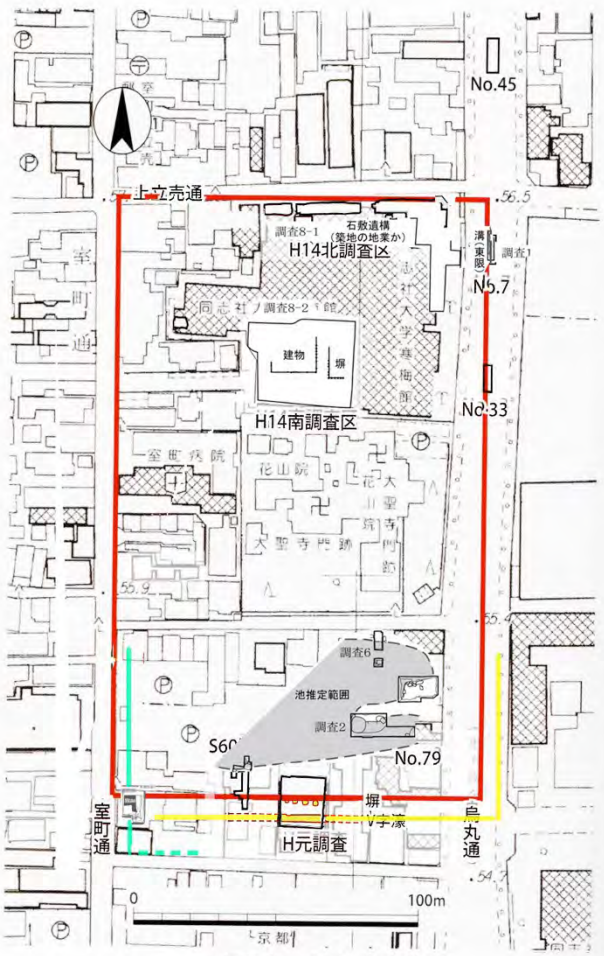
畠山図子
（上杉家本）



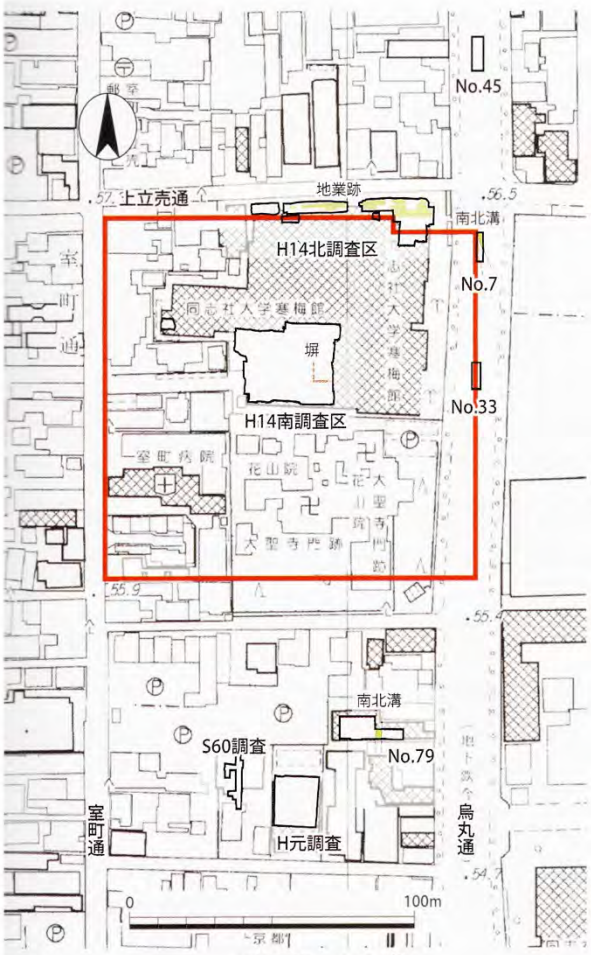
「ロ」の字形民家（歴博甲本）



室町殿 14C ～ 15C 前半

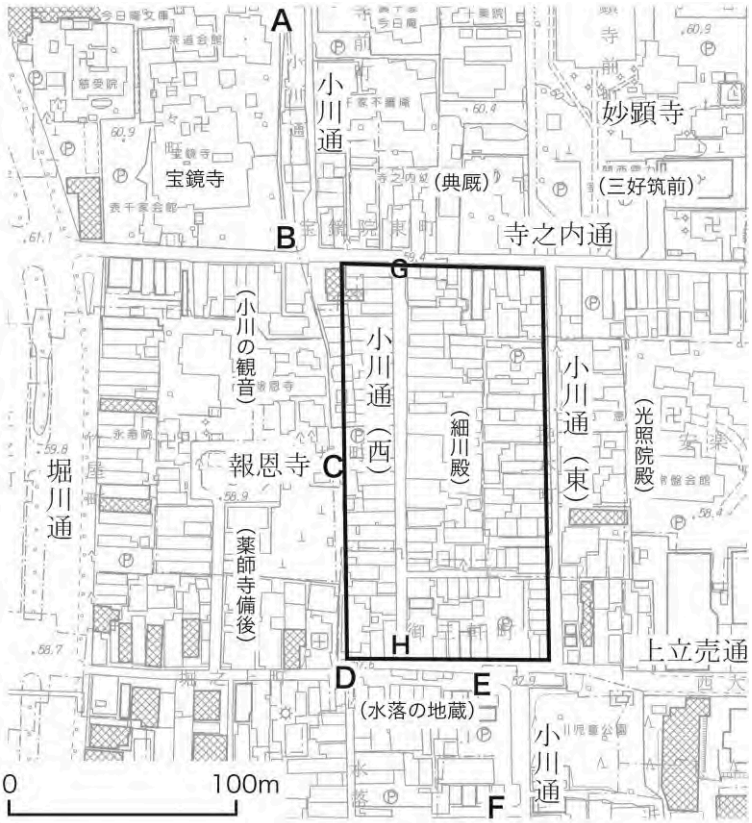


室町殿　15C 中～後半

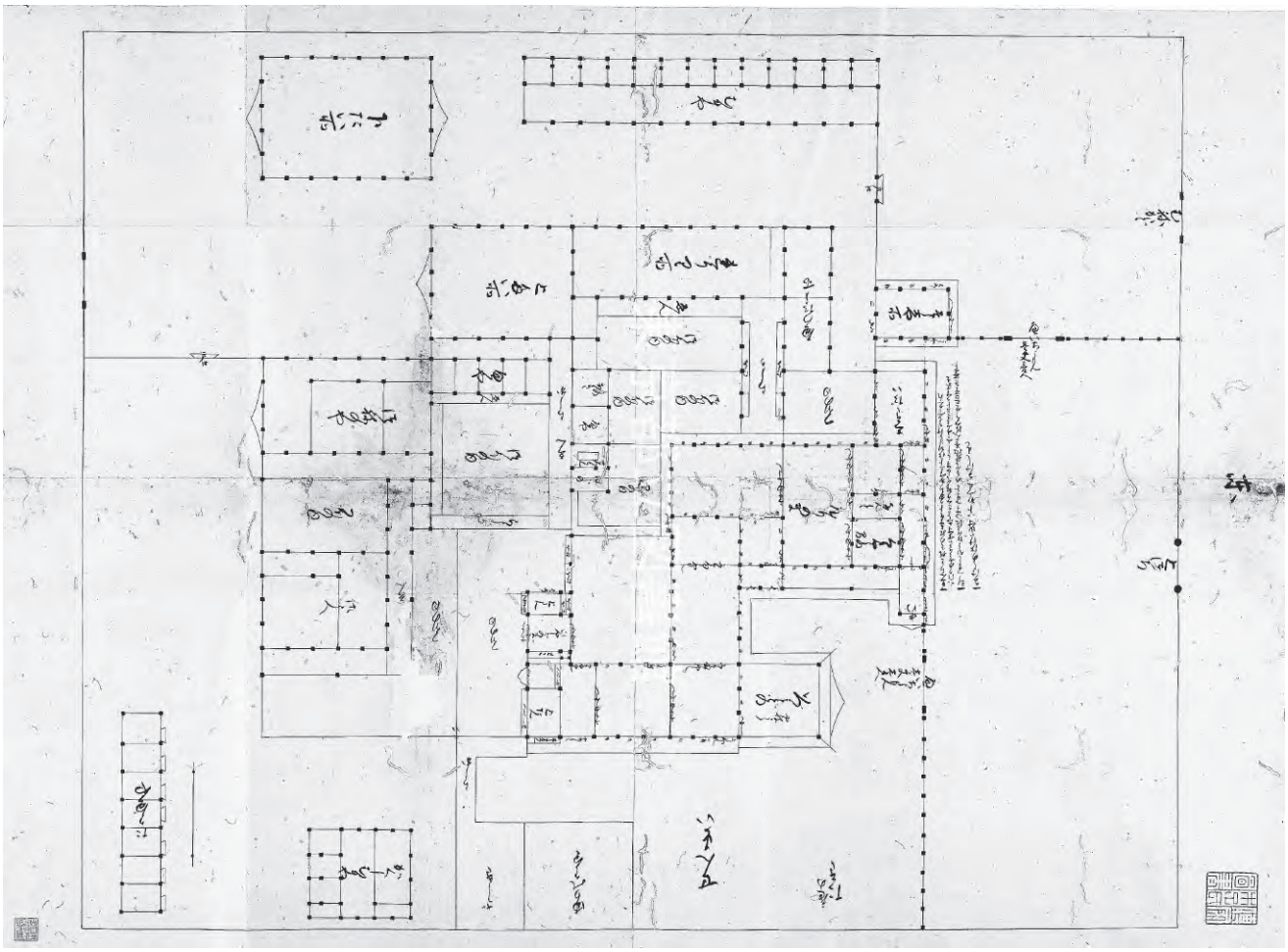


室町殿　16C 代

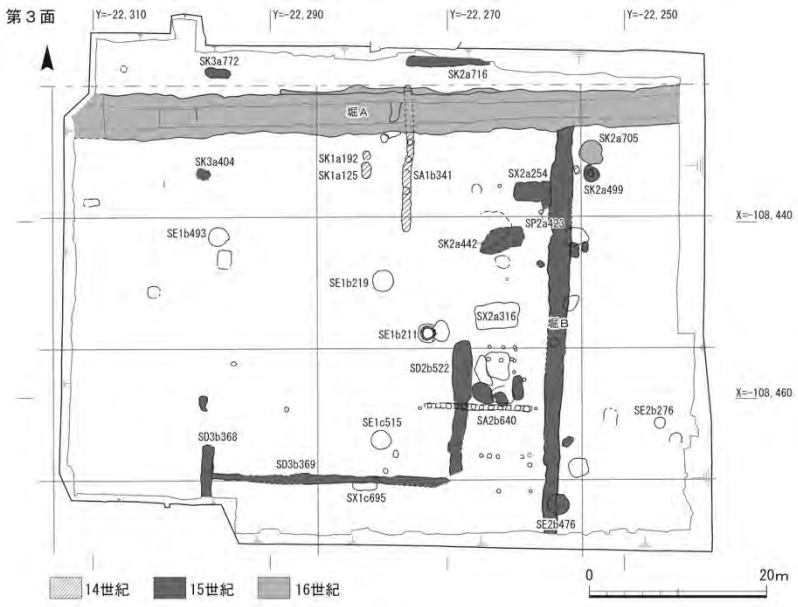
室町殿跡発掘調査図

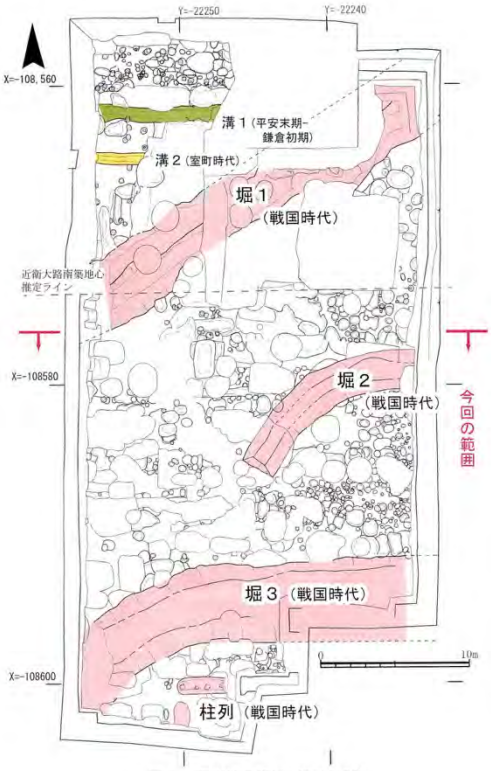


細川殿復元図

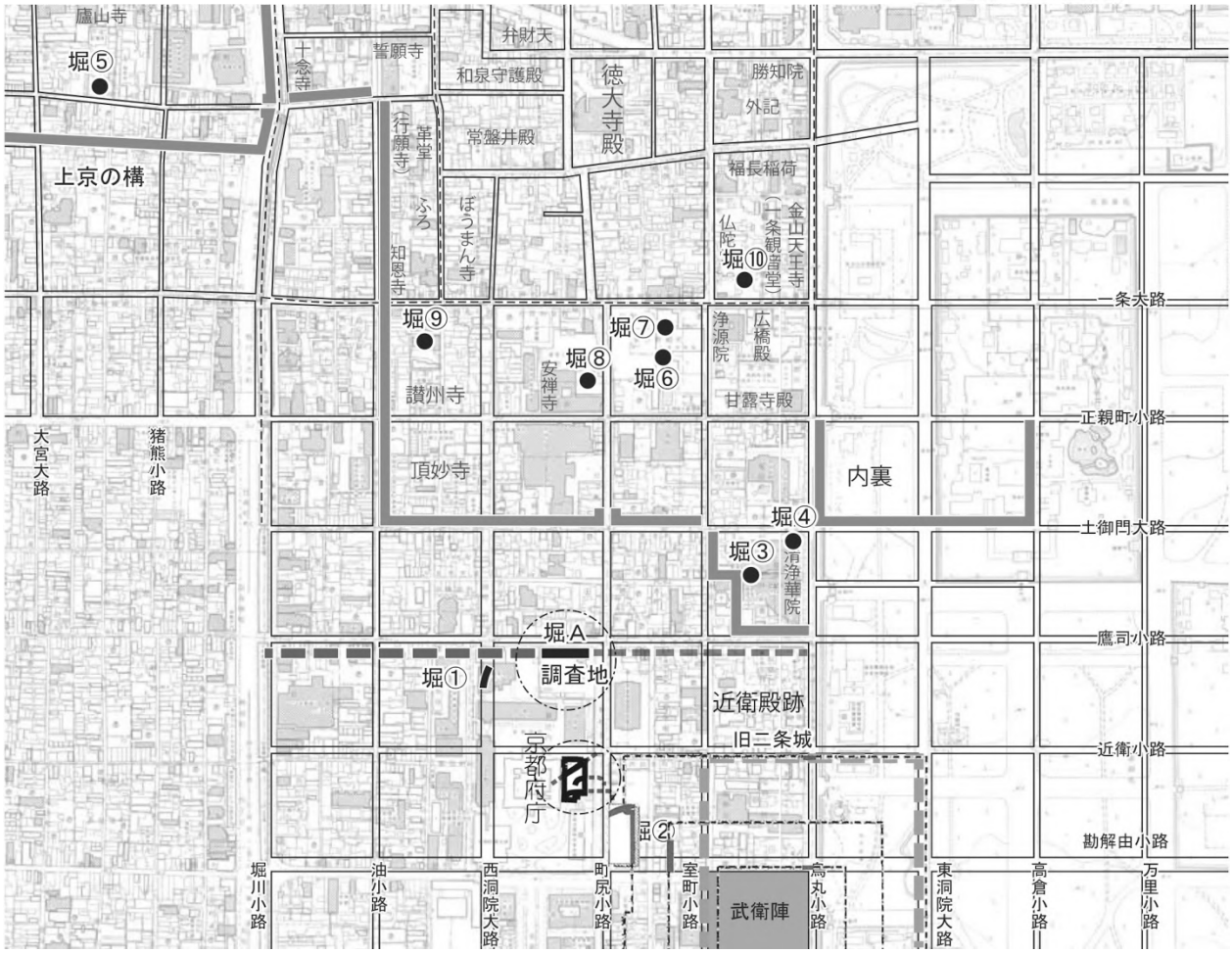


ほそかわ殿指図（東京都立図書館）

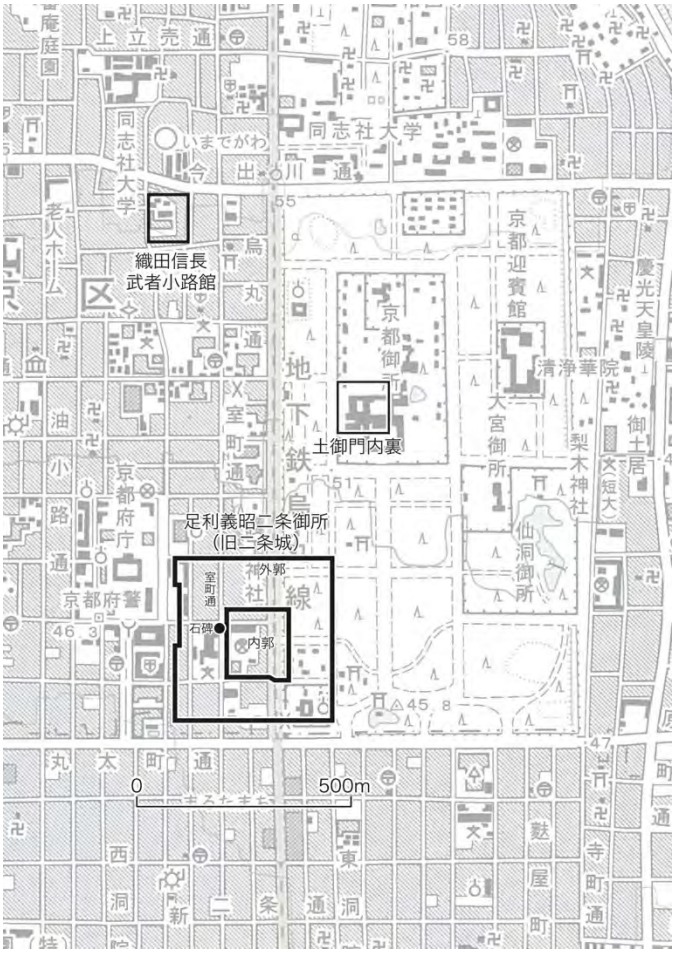




惣構（左京一条三坊二町）



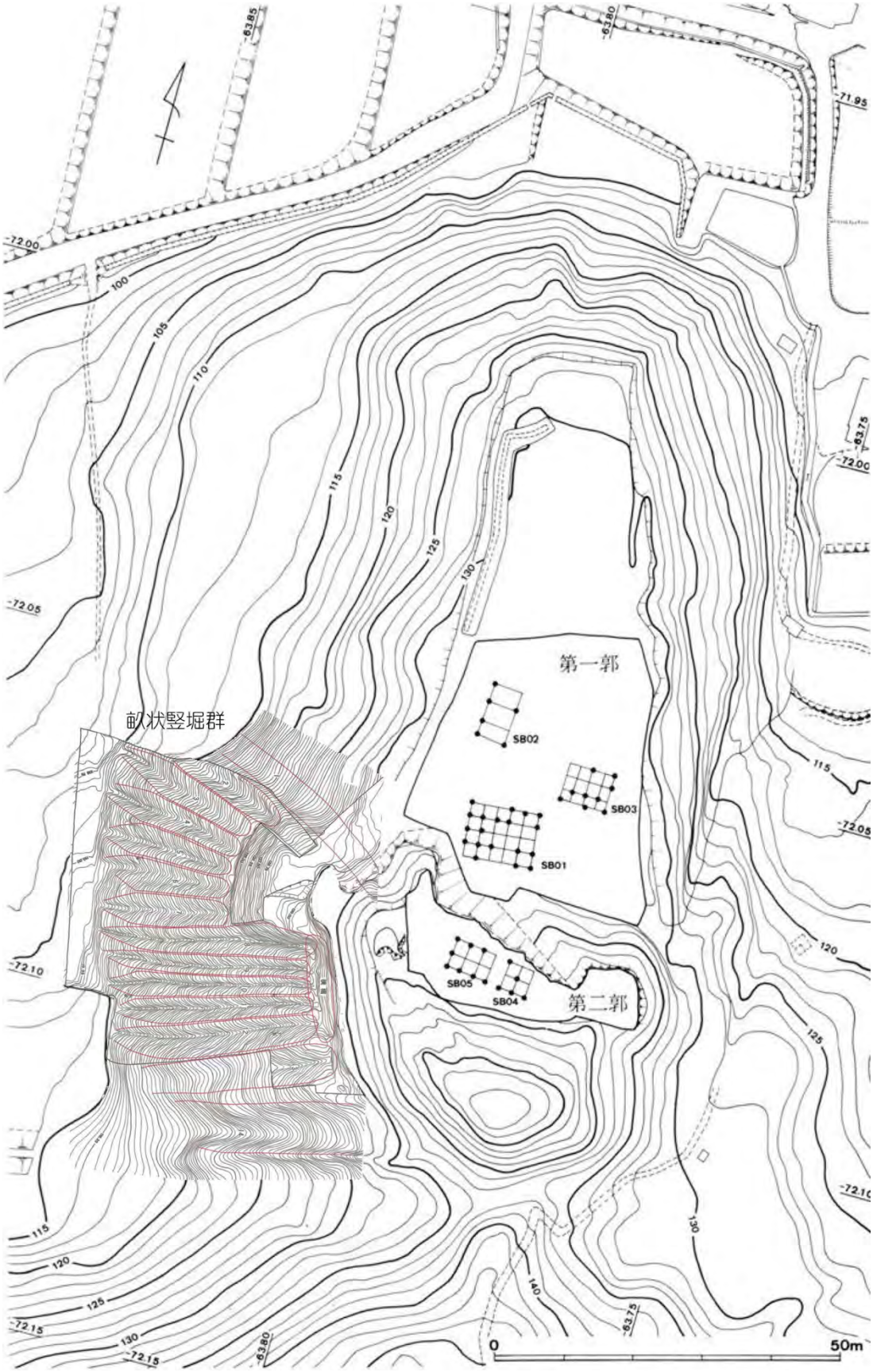
『後法興院記』明応８年（1499）10月10日条　「為要害京中堀事従京兆加下知云々。家門旧跡辺鷹司ヲ東西へ至堀河ニ可掘也云々」



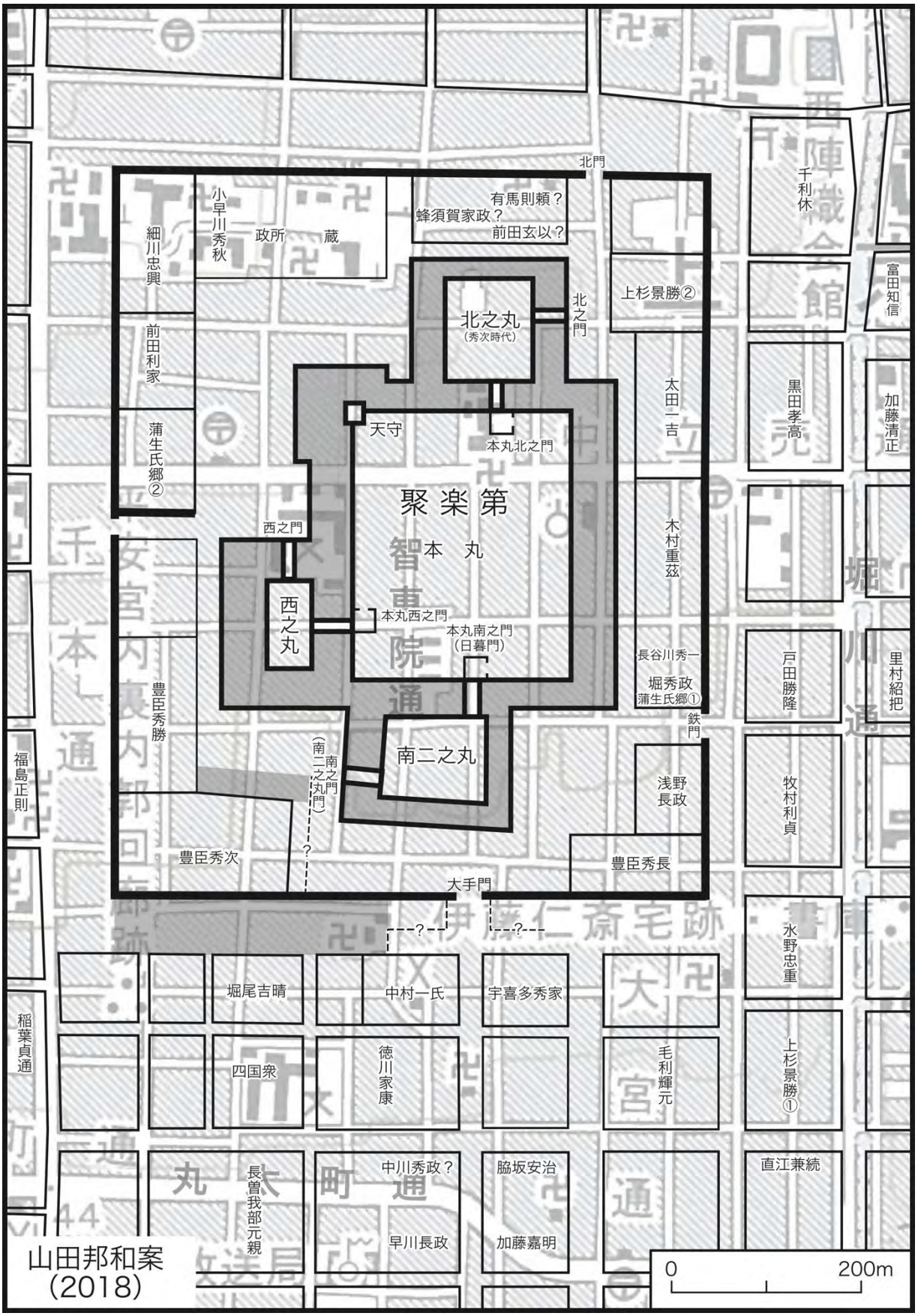
足利義昭の二条御所
（旧二条城）

「武衛」と闘鶏
（上杉家本）

本能寺復元図



京都府綾部市平山城跡（16世紀）


北門
有馬則頼？
蜂須賀家政？
前田玄以？
小早川秀秋
政所
蔵
細川忠興
前田利家
蒲生氏郷②
北之丸
（秀次時代）
北之門
上杉景勝②
天守
本丸北之門
聚楽第
本　丸
西之門
西之丸
本丸西之門
本丸南之門
（日暮門）
南二之丸
南之門
（南二之丸門）
豊臣秀勝
豊臣秀次
大手門
鉄門
長谷川秀一
堀秀政
蒲生氏郷①
浅野長政
豊臣秀長
太田一吉
木村重茲
千利休
富田知信
黒田孝高
加藤清正
戸田勝隆
里村紹把
牧村利貞
水野忠重
上杉景勝①
直江兼続
福島正則
稲葉貞通
堀尾吉晴
中村一氏
宇喜多秀家
四国衆
徳川家康
毛利輝元
長曽我部元親
中川秀政？
脇坂安治
早川長政
加藤嘉明
山田邦和案
（2018）
0
200m

聚楽第復元図（山田試案）

特別講演会資料　3

遺物からみる戦国・江戸のくらし

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター調査員
加藤　雄太

1．はじめに

戦国期の京都で用いられた器は、土師器皿を主体とし、その他に瀬戸・美濃焼や、中国産の青磁・白磁・青花の椀や皿がありました。16世紀の後半以降、世の中が安定してくると、美濃（岐阜県）で桃山茶陶が出現し、九州の肥前（佐賀県・長崎県）でも新たな器がつくられます。ここから江戸時代にかけて、陶磁器の生産は大きな発展を遂げていきます。今回はそのような近世の陶磁器に加えて、煎茶の普及と土人形に焦点を絞り江戸時代の人々のくらしを紹介します。

2．近世陶磁器を通観する

江戸時代約260年間の大まかな陶磁器の変化について紹介します。具体的には安土・桃山時代に出現する桃山茶陶から江戸時代前期の肥前陶器（唐津）と肥前磁器（伊万里）の誕生までと、江戸時代中・後期の肥前磁器と信楽焼の展開について概観します。

桃山茶陶の登場と肥前陶磁器の誕生

茶の湯で用いられる器は16世紀後半以降、中国産のものから国産の陶器に転換していきます。そして室町幕府の滅びた元亀４（1573）年から大坂夏の陣で豊臣氏が滅びる慶長20（1615）年の間に桃山茶陶が発展しました。桃山茶陶の代表的な器は主に美濃で生産されました。16世紀後半から「志野」の生産が始まり、そして17世紀初頭に「織部」が生産されます。

これら桃山茶陶が登場する16世紀後半ごろから、九州でも新しい器が作られるようになります。現在の佐賀県東部や長崎県北部で生産された肥前陶器（唐津）には、椀や皿などの日常雑器から茶器までさまざまな器がありました。それから少しおくれる1610年代から1620年代にかけて現在の佐賀県有田町周辺で肥前磁器（伊万里）の生産が始まります（大橋2010）。この「唐津」と「伊万里」の呼称は積み出しの港が唐津港、伊万里港だったため、この名称が定着しました。

京都では、江戸時代初期に出土する遺物の数や種類をみると、桃山時代の代表格であった美濃の陶器と、肥前陶器である唐津が多く見られます。また、1640年代になると肥前磁器が入ってくるようです（加藤2019）。

肥前の陶磁器の特徴は、海外からの技術が入ってきていることです。安土・桃山時代から肥前陶器の職人は朝鮮半島の陶工と交流があり技術を学んでいました。さらに文禄・慶長の役（1592～1598年）の混乱の後、日本で作陶する陶工があらわれ、朝鮮半島由来の陶器と磁器の生産技術が日本に入ってきました。当初は、朝鮮半島由来の技術で中国の製品を模倣した磁器の生産していましたが、1640年代以降、中国由来の技術が導入され、鮮やかで美しい高級食器としてさまざまな製品が作られ海外にも輸出されていきました。

肥前磁器と信楽焼の展開

肥前磁器のうち波佐見はオランダなどのヨーロッパ向けの高級食器を生産していましたが、1684年に中国が展海令を発布すると輸出競争に敗れ、国内向けの「くらわんか」とよばれる大衆食器の生産に特化しました（中野2013）。こうした大衆化は肥前磁器全般にもみられます。当初高級であった磁器製品から新たに安価な製品を大量に作ることによって、様々な肥前磁器が全国的に普及する契機となりました。ちなみに、「くらわんか」の名称は淀川の京都・大坂間で「酒くらわんか、米くらわんか」の掛け声で知られた「くらわんか舟」に由来します（中野2013）。

信楽焼はタヌキの置物で有名ですが、江戸時代にはタヌキの置物は存在していませんでした。戦国時代や江戸時代の初期にかけてはすり鉢や甕などを主体に生産していましたが、18世紀半ば以降、京都の焼き物職人との結びつきを強め、陶器の日常雑器を中心に大量の製品を生産します（畑中2003）。

18世紀後半になると、京都では肥前の磁器と京・信楽系の陶器が遺跡から出土する陶磁器全体の９割を占めるようになり、一つの遺構から出土する総量も非常に多くなります（加藤2019）。こうした物質的な豊かさは江戸時代後期の豊かさの象徴的な現象ともいえます。

３．煎茶の普及

煎茶は、今日、コンビニで見られるお茶の多くが煎茶であるように、日本人になじみ深いものとなっています。黄檗宗の隠元隆琦（1592～1673年）によってもたらされ、18世紀にかけてさまざまな人の手で社会に浸透します。特に煎茶が普及するきっかけをつくった売茶翁（高遊外）（1675～1763年）は、黄檗宗の僧で61歳になってから京で禅道と世俗の話をしながら煎茶を売り、多くの文人墨客に影響を与えました。売茶翁以降、京都や大坂で煎茶が広がり、煎茶を好む文人たちがあらわれます。京都では町人や、武士から公家まで、様々な職業や生まれの人々が煎茶を嗜み、「文人趣味」に没頭していたことが分かっています（森2016）。

考古学的には公家衆の屋敷が立ち並んでいた京都市公家町遺跡の発掘調査成果により18

世紀後半から煎茶に関連した遺物が出土することが確認できます（京都市埋文研2004）。この時期から煎茶が文化として受け入れられていたことが遺跡からもわかります。

そして、この時期には公家も町人も含めて煎茶や琴、囲碁、書や画などの学問をよく修めていることが求められる時代が訪れます。中国から入ってきた「文人趣味」と呼称される文化で、教養となる様々な学問を楽しみ習得したようです（京都市1973）。

こうした社会の動きは、出土遺物の増加する18世紀後半からみられるので、物質的に豊かになった人々が、心の豊かさを求めて行動した結果なのかもしれません。

ちなみに、日本における考古学の誕生もこの時期とされています。当時は「好古」と呼称され、古ければ何でもよかったようですが、古い物好きの会員が集まり、自分たちの収集品を見せ合い、話や議論をするサロンが形成されていました（平野2005）。

また、18世紀中頃に永谷宗円（ながたにそうえん）が緑茶製法を考案したことも煎茶の普及に大きな影響を与えました。

４．土人形の展開

江戸時代はまた、おもちゃの需要が拡大した時代でもあります。代表的なものはミニチュア製品と土人形です。ミニチュア製品は主に雛道具やままごと道具として用いられたようです。土人形については様々な用途や後述する「いわれ」や「おもい」があったようです。

土人形には大きく分けて人物と動物があります。これらの人形は京都では伏見街道沿いで生産されたようです。現在伏見人形と呼称される京都の土人形には数千種類もの数があります。19世紀に各地で土人形が作られるようになる中で伏見人形は手本となり、全国の土人形の祖ともいわれます（奥村1976）。

人形には様々ないわれがあったとされます。今回はその中の一部を紹介します。

犬の人形は、安産のお守り、願掛けとして愛されました。これは当時、町内で飼育されていた犬が知らぬ間に子を産んでいるところから来たとされます。また、狆（ちん）はつぶれたような鼻などの特徴から当時猫と犬の中間の動物と考えられていました。そのため、中間の「中」の字に「けものへん」を充てた和製漢字が作られました。狆は当時公家や大名などの上級の武家で飼育された屋内飼いの動物で、非常に高価でした（桐野・吉門2020）。「とてもじゃないが手がとどかない、でも、土人形なら手に入る」といった思いがあったのかもしれません。

極めて単純な形をした、牛の人形は「一文牛（いちもんうし）」と呼ばれ、この人形の腹に米をつめて川に流すと皮膚の病を避ける、と言われたそうです。これ以外にも様々な牛の人形がありますが、いずれも「草」（くさ）を食べる牛が皮膚病である「瘡」（くさ）も食べてくれるだろ

うという思いがかけられています(奥村1976)。

このほかにも猿回しなどの当時の職業人の人形や、歌舞伎役者の人形がありました。猿回しには「靭猿(うつぼざる)」の狂言があるので、もしかすると狂言の内容を知っている人が面白がって購入する人形だったのかもしれません。このように土人形はおもちゃとはいえ、様々な側面があったことが分かります。

5．おわりに

江戸時代の文化を考古学の視点から紹介しましたが、いかがだったでしょうか。陶磁器の変化を通して時間が経つにつれて豊かになる社会が見えてきたのではないでしょうか。煎茶文化では熟成された文化が教養として愛された姿が、土人形の「いわれ」から当時の人々の考え方が、それぞれ見えてきませんか。

江戸時代というのは、人々が豊かさを享受し、文化を深化させていった時代であったこと、またそこに、明治時代の発展の原動力を見出していただけましたら、幸いです。

【参考文献】

大橋康二「肥前磁器生産技術の地方窯への伝播」(『東洋陶磁』第三十九号　東洋陶磁学会)　2010年

加藤雄太「京域の町人と公家の事例」(『関西近世考古学研究26　近世町人の食文化』関西近世考古学研究会)　2019年

中野雄二「江戸時代における波佐見窯業の展開」(『くらわんか藤田コレクション－寄贈記念図録－』波佐見町教育委員会)　2013年

畑中英二『信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版　2003年

森達也「煎茶の歴史と展開」(『煎茶－山本梅逸と尾張・三河の文人文化－』愛知陶磁美術館)　2016年

京都市埋蔵文化財研究所『平安京左京北辺四坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告書第22集　2004年

京都市埋蔵文化財研究所『平安京左京六条三坊五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-8　2005年

京都市編『京都の歴史　6伝統の定着』學藝書林　1973年

平野恵「好古から考古へ －近世から近代へ継承された学問の形態－」umdb.um.u-tokyo.ac.jp 東京大学総合研究博物館　2020年11月15日閲覧

奥村寛純『伏見人形の原型』伏偶舎　1976年

桐野作人・吉門裕『愛犬の日本史　柴犬はいつ狆と呼ばれなくなったか』平凡社　2020年

京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課『三条せと物や町－桃山茶陶－』京都市文化財ブックス　第30集　2016

図１　京都と美濃と肥前の位置関係

写真１　志野（藪之内町）

写真２　織部（藪之内町）

写真３　肥前陶器（唐津）（藪之内町）

写真４　肥前磁器（初期伊万里）（藪之内町）

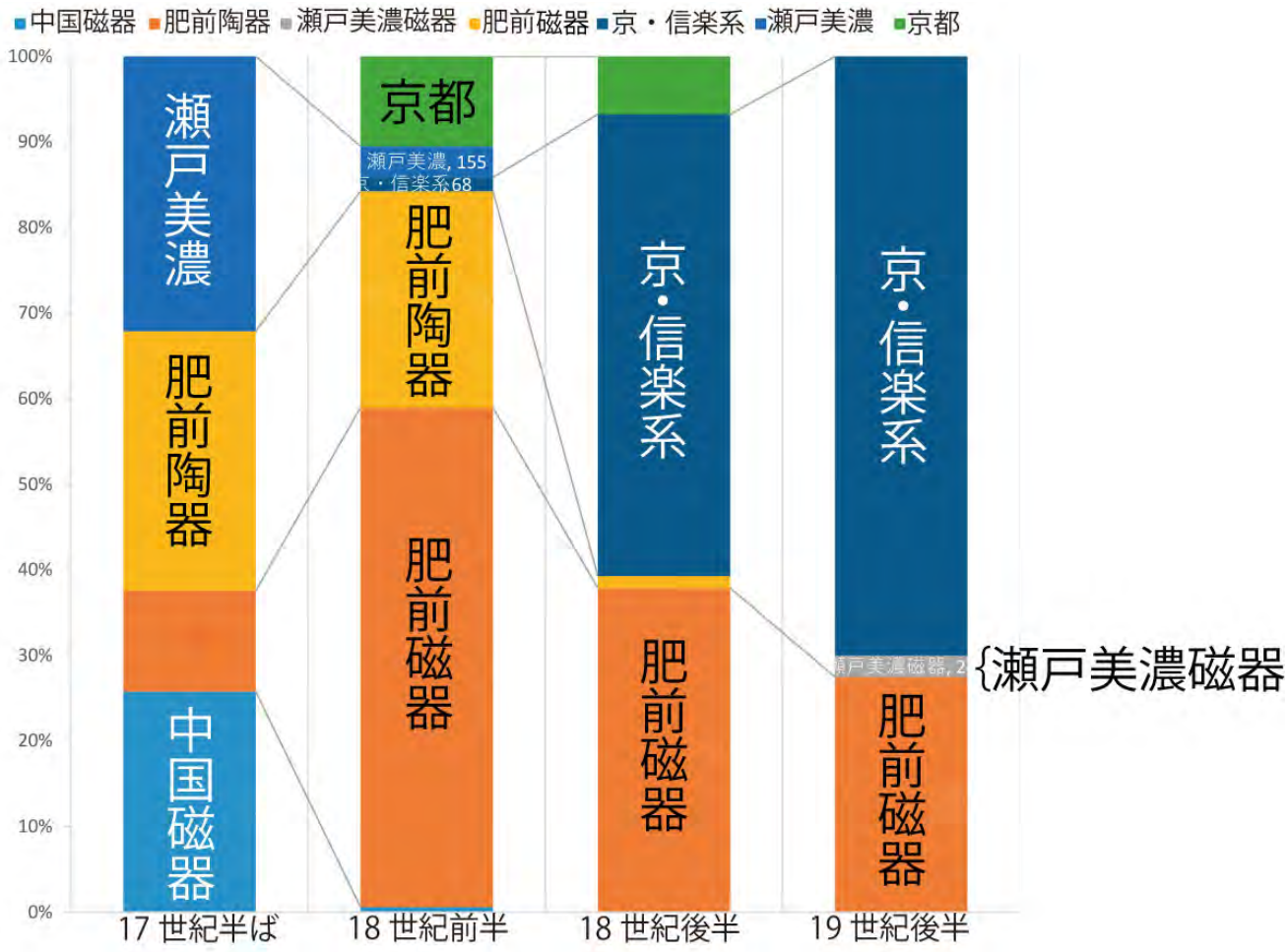


図２　食器の移り変わり（京都市埋文研2005『平安京左京六条三坊五町跡』を基に作成）

写真５　肥前磁器（くらわんか）
（西大路町）

写真６　京・信楽系陶器（藪之内町）

写真７　蓮月焼の煎茶道具（京都大学構内遺跡）

写真８　中国宜興窯の急須（藪之内町）

写真９　「道八」銘の煎茶道具（丹波亀山城）

写真10　ミニチュア土製品など(寺町旧域ほか)

写真11　古墓出土の土人形(寺町旧域)

写真12　狆の人形(左・西大路町、右・伝世品)

写真13　一文牛の人形(常盤井殿町遺跡)

KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターの現地説明会や埋蔵文化財セミナー、発掘調査速報展などの催し物は、下記のホームページでもご案内しています。

http://www.kyotofu-maibun.or.jp
公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒 617-0002　向日市寺戸町南垣内 40 番の 3
Tel （075） 933-3877（代表）　Fax （075） 922-1189